

卓から消える食品」 全な食品」

壊滅した気仙沼港



ハウレンソウ、牛乳… 風評に踊らされるな

被災地の状況もひどいが、首都圏でも異常事態が続いている。コンビニやスーパーに食料品がない。米、飲料水、カップ麺、缶詰、冷凍食品……、陳列棚はいずれもスカスカ。世界最大の経済都市で何が起きているのか。

「震災から数日間はおお客様が殺気立っていて怖かった。あんな目のお客様を見るのは初めて。弁当やカップ麺はすぐに完売し、米や水のまとめ買いが後を絶たない。

東北で水揚げできず西日本へ（和歌山県・勝浦港）

商品補充をすると一人で二リットルの水十本を買っていく人がいて、「これはダメだ」と先週から一人一点の個数制限を始めました」（都内スーパーの店員）

一度崩れた需給バランスはなかなか元に戻らない。そこに計画停電と燃料不足が追打ちをかけ、物流機能のマヒも起こっている。

大手卸会社では、

「地震後の二日間はこの製造工場もストップしました。今はフル稼働していますが、でも食品の流通はすべてギリギリで回している。一日途切れると引きずる。カップ麺も朝一番にはきちんと並ぶが、置いた途端にすぐになくなる。余震と計画停電の影響で、私たちの仕分け作業も遅れ気味。燃料不足も深刻で、製造はできるけど配送ができないメーカーもある」

配送トラックに燃料がないのは、プームの「エコドライブ」が背景にある。

「大手の配送会社では、その日走るだけの最低限必要な燃料しかタンクに入れておかないんです。燃料の重

さを積んで走るとは環境に良くない、必要な分だけ入れましょうと。その心がけが裏目に出て、トラックの配送が止まった」（物流に詳しいジャーナリスト・刈屋大輔氏）

普段は山積みの商品がない。この不安が消費者のまとめ買いを加速させる。「ガソリンが足りない、車

高級魚が売れなくなった

長期的に見ると、水産物の品薄が食卓に響く可能性もある。今回の津波で三陸沿岸の漁業が壊滅的な被害を受けた。漁獲量が豊富な三陸沖は「世界三大漁場」の一つに数えられている。

「カキ、サケ、ワカメの定置網や養殖施設が壊滅状態。気仙沼港はカツオ漁の大事な中継基地で、西日本からの漁船も気仙沼を基地にして漁を始める予定だったけど基地自体がなくなっ

た。付近の海中にはまだ船や家が沈んでおり、復興にはしばらく時間がかかる」（全国漁業協同組合連合会）
築地市場も入荷量は減少

が動かない。すると消費者は『他の物も足りなくなる』と考えるんですね。いろんな物に手が伸びて、今必要な物が手に入っても『次は何を探そうか』となる。それが重なりますから、しばらくの間はいつも何か足りないという状態が続くでしょうね」（中田信哉・神奈川大学教授）

傾向。横浜の魚市場は入荷量が六割にまで落ち込んだ。西日本からの水産物は燃料不足であまり届かないという。

ただし震災から一週間たち、市場関係者からは別の悲鳴も聞こえてきた。

「パーティーや飲み会が次々と中止になり、結婚式を取りやめにする人までいる。マグロなどの高級な商品がピタッと売れなくなり、消費者の皆さんは保存品はどんどん買い込むけど、生鮮品には見向きもしない。魚はガスで調理をすれば食べられます。早く普段どおりの生活をして